

幼児の食育にボランティアを取り入れた栽培活動

—^{えにわ}恵庭幼稚園の事例から—

古郡 曜子・杉村留美子

I はじめに

幼児期の栽培活動は、好き嫌いの改善・食への興味関心の育成・食べることの大切さや楽しさにつながる食育としての有効性が見出されている。木田氏は幼稚園における野菜栽培活動が食育に効果があることと、保護者の参加による効果を報告（木田・武田・荒川・大久保 2012）している。

筆者は先行研究として、幼稚園における栽培活動における幼児教育者の考えの考察（古郡 2013）を行った。見出されたことは幼稚園教育での栽培活動計画作成の重要性と幼児教育者の労作業負担と専門的な知識・経験不足であった。

本研究では、栽培活動を重要な幼児教育と位置づけている恵庭幼稚園の教育計画と実践を把握することにより、栽培活動の基本的な考えと必要な教育計画、環境設定の内容、さらに幼児教育者の負担に関する対応を探った。

II 方 法

恵庭幼稚園（北海道恵庭市）における平成 24 年度年間教育計画での食育計画と栽培計画を幼児教育的観点から分析した。その際、園長への半構造化インタビューをおこない、エピソード分析法を用いて各計画の詳細な内容を探った。調査時期は平成 25 年 1 月であった。

質問内容は栽培活動の「ねらいと指導計画」、「活動状況」、「職員の環境設定」の 3 つとした。

III 結 果

1 栽培活動のねらい・栽培指導計画と栽培活動

表 1 に恵庭幼稚園作成の「食育指導計画」を示した。「栽培・収穫を通して」が冬季以外はすべて一貫して行われている。栽培活動のねらいは、「自然の恵みと働くことの大切さを知り、感謝の気持ちを持って食事を味わう」である。

園長は食べ物を育てることと命とのかかわりについて「自分の命は何処から来るのかというと、1 つはご先祖様から命が脈々と受け継がれていること、もう 1 つは今ある命を頂いて自分の命があることです。では、今ある命は何処から来るのかと言ったら、食べ物です。その食べ物を育てて、その食べ物の命を頂きましょう。」と述べていた。これは食物と命とのかかわりを意識したねらいである。

さらに、地域性については「ここで生まれ育つ子どもは、ここの風土や気候、自然条件を体の中に入れていかないとはいけません。それには作物の栽培が一番いいのです。その土地の気候風土を教えてくれることと、北海道恵庭は開拓の歴史があるので、先人たちが森の中を切り開いて作物の栽培や住む町を作り出した風土文化を学ぶためには畑が必要です。そこには“労作”という人が生きる上でなくてはならない活動が含まれています。畑での労作が大事なのです。」と述べていた。

表 1 食育指導計画（恵庭幼稚園）

	生活を通して	栽培・収穫を通して	調理を通して	その他
I 期 4～5月	正しく座る 集団で食べる楽しさを知る 給食の雰囲気に慣れる 食事の仕方を知る	食べる料理を見通して 栽培する作物の種類を決める 種や苗を植え、作物を 育てることの大切さについて考える		「いただきます」の挨拶を覚える 食育に関して保護者へ積極的に啓発を行う
II 期 6～9月	食べ物に興味を持ち、 食べられる食材が増える 食べ物の役割を知り、 バランスよく食べることで丈夫な身体を作ることを知る はし等を正しく持つ	夏や秋の野菜を知る 天候などによって野菜の収量が異なることを知る 作物を育てる苦勞から生産者に感謝の気持ちを持つ	旬の野菜があることを知る 野菜を調理することで料理を作ってくれる人に感謝の気持ちを持つ 調理をすることで食べ物に親しみを持つ	給食試食会の実施 食に関する保護者学習会の実施
III 期 10月～ 11月	食事中的行儀を知り、 楽しく食事ができるようにする 茶碗の正しい持ち方等作法を知る	秋の野菜を知る 稲刈りから精米までの作業を通して、感謝の気持ちを知る	収穫を喜び、地域で培われた食文化に関心を持つ	収穫祭の実施 収穫祭への保護者参加
IV 期 12月～ 3月	年中行事と食の関わりを知る 決められた時間内に食事ができる 偏食しないで何でも食べられるようになる		秋に収穫した野菜を保存食として加工し、日本の食文化を学ぶ	地域、保護者が参加してのもちつき

（網掛け・太字は筆者）

これは、北海道の開拓開墾の歴史を知るために幼児が畑について感じる必要性を「体の中に入れる」という表現で述べたのである。

さらに、本幼稚園での栽培の具体的な目的は次のようであった。

- ①栽培、飼育、食事などを通して、食べ物に対し、身近な存在として親しみを持ち、すべてのいのちを大切にしようとする心を持つ
- ②身近な自然にかかわり、世話をしたりする中で、料理との関係を考え、食材に対する感覚を豊かにする
- ③身近な動植物に関心を持つ
- ④動植物に触れあうことで、いのちの美しさ、不思議さなどに気づく
- ⑤自分達で野菜を育てる
- ⑥収穫の時期に気づく
- ⑦自分たちで育てた野菜を食べる。
- ⑧食べ物を皆で分け、食べる喜びを味わう

次に、園長は生産活動の重要性を「消費だけでは人を豊かにしないと思っています。人を豊かにするには生産であり、生産活動が出来る人の方が人生は豊かになります。とすると、幼児期に教えるのは消費行動ではなく、生産活動となります。生産活動は創作活動でもあり、ですから音楽や粘土の造

形と同じように生産としての畑があるのです。」と述べた。

ここでの生産活動としての栽培の教育内容は次のようである。

- ①幼児教育の目的「子どもの育ちと体験の優先」を重視する
- ②食育に特化せずに日常の教育の一環として環境設定をする
- ③子ども自らの発見や活動を導く
- ④子どもに自然の営みを実感させる
- ⑤農業地域に近接した住宅地という地域性を生かす

表2に恵庭幼稚園作成の「栽培作物と場所および担当学年」を示した。4歳児が畑での栽培、5歳児が水田での米栽培である。

表2 栽培作物と場所および担当学年（恵庭幼稚園）

園庭菜園			
作物	担当学年	場所	備考
小豆	4歳児	玄関横	種（昨年収穫）
大豆	4歳児	玄関横	種（昨年収穫）
ピーマン	4歳児	ビオトープ横	苗（農協）9本
なすび	4歳児	ビオトープ横	苗（農協）9本
きゅうり	4歳児	ビオトープ横	苗（農協）6本
ミニトマト	4歳児	ビオトープ横	苗（萩沢種苗研）6本
じゃがいも	4歳児	玄関横	種芋（農協）
人参	4歳児	玄関横	種（農協）4袋
春大根	4歳児	砂場横	種（農協）1袋
秋大根	4歳児	砂場横	種（農協）1袋
菜種	4歳児	河川敷花壇	種（アレフ寄贈）

園庭水田			
作物	担当学年	場所	備考
もち米	5歳児	園庭水田	苗（農協寄贈）

（太字は筆者）

以上のことから、栽培活動を食育のみに特化せずに幼児教育としての創作の視点を含めた多様性のある環境設定として行っていた。幼児教育における環境とは幼児が遊びを通して学ぶ場であり、人とかかわりであり、幼児が五感で感じる物や音や天候なども環境としている。したがって、本園での栽培活動は多様な幼児教育の要素を統合した環境設定の一部であることが分かった。

2 栽培活動の環境設定とボランティア

具多的な栽培活動の環境設定は次のようである。

- ①年間行事への組み込み（作物での調理など）
- ②園職員担当者の配置と打ち合わせ
- ③園職員以外の協力者（元農業従事者）への依頼と作業内容の確認
- ④保護者への参加協力（作物での調理や調理援助）依頼と協力内容
- ⑤必要な物品の入手方法の設定

⑥畑の確保（園敷地外の借入れ）

これらの環境設定をふまえた「食育事業」を表3に示した。栽培には元農業従事者ボランティアの存在があった。

表3 食育事業（恵庭幼稚園）

事業名	事業内容	備考
菜園での野菜栽培	園児と一緒に植付け→生育管理→収穫→調理→試食まで一貫した保育活動を通じ、食物への関心や感謝の気持ちを体験させる。 ～じゃがいも、人参、タマネギ、ピーマン、カボチャ、きゅうり、枝豆、ミニトマト、トウモロコシ～	園庭内菜園と河川敷菜園で実施 *元農業従事者ボランティア
水田でのモチ米栽培	園児と一緒に田植え→生育管理→稲刈り→脱穀→粳摺り→精米→もちつきまで一貫した保育活動を通じ、主食である米への関心や感謝の気持ちを体験させる。	園庭内水田で実施 *元農業従事者ボランティア
牧場体験	園児と一緒に牧場で酪農体験を行い、動物との触れ合いを通して酪農への関心や乳製品への興味関心を持たせる。 ～搾乳、哺乳、バター作り、乗馬、トラクター試乗～	遠藤牧場で実施
親子調理	父母の会行事や園行事の中で親子で一緒に食事を作り食べる機会を持ち、親子のコミュニケーションの促進と食べ物づくりの楽しさを教える。 ～ピザ作り、カレーライス～	父母の会行事、園行事で実施
季節や文化を通じた食育	旬の食材や年中行事を通して調理や試食を行い、季節感や伝統的な食文化を教える。 ～芋餅、月見団子、焼き芋、もちつき～	行事ではなく日常保育として園内で実施 *保護者・豆腐製造者ボランティア
給食を通じた食育	ねらい ・心身の健全な発達のためにバランスのとれた栄養豊かな食事を提供し健康の増進・大意の向上を図る。 ・正しい食事の在り方や望ましい食習慣を身に付け、好ましい人間関係を育てる。	

（網掛け・太字・*は筆者）

園長は栽培での幼児教育者の負担の軽減については「必ず栽培を成功させなくてはいけないのではありません。家庭菜園の延長で考えていけば、そんなに深く考えなくとも、『採れたね』とか、『採れなかったね』、『どうしてだろう』など、特別のことではなく普通感覚でよいのです。生活の延長線上であるから出来ることなのです。」と述べた。

さらに収穫のできないことに関しては「じゃがいもが全滅して、今年はじゃがいも掘りが出来なかったね、そのことがその子の一生に大きな左右をするかって言うと、幼稚園時代にじゃがいも掘らなくてもそんなに人生は左右されない。いい意味で適当ですね。がんばり過ぎない。」と述べた。これは、職員が栽培活動の失敗を恐れずに取り組めるための考え方ともいえる。

また、幼児教育者が習得していない栽培の専門的な知識や技術の習得について「元農家の方に講師として来てもらって畑管理のアドバイスをもらうことにしました。そのことで先生方が畑をより作りやすくなりましたし、農家の“おっちゃん”が子ども達と一緒に『これはこうなってるんだぞ』と言っ

てくれることがとても良いのです。」と述べた。

ボランティアと幼児とのかかわりについては「週に1回来てもらって、その時間帯には農家の“おっちゃん”がいて、その農家の“おっちゃん”がいる時間帯には、子どもたちは行っても行かなくてもいいんです。」と述べた。

このことは、栽培のプロと幼児のかかわりを重視した考えである。幼児教育を行う幼稚園が園内の教育にこだわらずに、外部の人々とのかかわりから幼児自身が体験して学ぶことを重視した考えである。

さらに、収穫された作物の調理に関しては保護者ボランティアと豆腐製造者ボランティアを積極的に依頼していることについては「『味噌作れる人いませんか』、『トマトペースト作れる人いませんか』、『ぜひ作ってください』と地域や保護者の方に言っています。どんどん園に入ってもらうことで先生方の負担が減ります。」と述べた。

さらに幼児のお手伝いについては「大人が近くにいる周りで子どもがウロウロしているという環境がいいんですね。大人が作っている姿を子どもは見に行きます。『手伝うかい?』と聞いたら『うん』と言って手伝います。それは『手伝い』でも子どもは自分が『作ったさ』と言います。」と述べた。

このことは、保護者と園児のかかわりを家庭でのお手伝いの延長としてとらえ、幼児教育と家庭教育の境界をもたない考えである。さらに、幼児自身がお手伝いから得られる達成感を想定している。

以上のことから、保護者の参加は職員の負担軽減となり、幼児と大人とのかかわりが増えることで、知識や技術の学びにつながるお手伝いへの誘導となっている。このことは、幼児の達成感を得ることへのつながりともなった。

Ⅳ 考 察

子どもの栽培活動における保育・教育の目的は「植物（成長する命）とのかかわりを知る」・「食べ物としての植物への認識を持たせる」・「育てることの楽しさを実感させる」・「労作業の達成感を味わわせる」などがある。これらは、幼児自身が幼児らしい感性によって見出され、育まれていく。幼児教育者はその教育効果を目指す。

栽培活動において、幼児教育の基本を重視して計画を立てて環境設定することは重要であり、食育効果を得ることにのみに特化せずに幼児の身近な環境設定をすることを基本としたい。すなわち、栽培活動は幼児教育の多様な要素を統合したものである。

子どもに十分な栽培活動を体験させるためには、畑の確保と季節ごとの労作、天候に左右されることへの配慮など多岐にわたる。このことは、幼児教育者のみで行うことは精神的・時間的・労働的に無理が生じやすい。幼児教育者は保育の専門性を持っているのであって、保育の重要性和栽培の成功とは必ずしも一致しないことから、幼児教育者は本来の保育を優先すべきである。

栽培過程の失敗や収穫不可には幼児教育ならではの学びがある。それは失敗の理由解明や改善だけではなく、幼児が失敗や収穫不可の悲しさやくやしなどの残念な思いを実感することである。成功体験も重要であるが、失敗から得られる体験も必要である。

本研究では、畑の確保と栽培方法を熟知した協力者へのボランティア依頼、保護者の参加の促しなど園職員以外の人々への協力を求めていることで、無理なく栽培活動のできることがわかった。すなわち、幼児教育における地域と保護者の関わりの必要性がわかった。

さらに、ボランティアの方々の活動を子どもが自由に参加・見学することで、保育の広がりを見出すことができるかわかった。栽培活動の労作と専門知識・技術はボランティアを募ることで実現させ、ボランティアの方々と園児との関係性も、幼児教育の重要な環境となっていた。

恵庭幼稚園の栽培実践は保育本来の目的を食育と分離せずに位置づけることで幼児教育者の負担という課題を解消できるものであった。

今後は、ボランティア協力者の確保にはどのような配慮や条件が必要であるかを課題としてさらに研究をすすめていきたい。

V まとめ

恵庭幼稚園では地域性を把握し、園児の生活を通して自然との関わりの重視していた。

栽培活動の教育的な考え方は①幼児教育の目的「子どもの育ちと体験の優先」を重視する②食育に特化せずに日常の教育の一環として環境設定をする③子ども自らの発見や活動を導く④子どもに自然の営みを実感させる、であった。

栽培活動計画は①栽培活動の年間計画②年間行事への組み込み（作物での調理など）③園職員担当者の配置④園職員以外のボランティア協力者（元農業従事者など）への依頼⑤保護者への参加協力（作物での調理や調理援助）依頼⑤必要な物品の入手方法の設定、がなされていた。

栽培活動の環境設定は①畑の確保（園敷地外の借入れ）②栽培協力者の作業の内容③協力保護者の確保と協力内容など③通常教育の一環としての栽培活動の位置づけ、がなされていた。

これらのことから、恵庭幼稚園の栽培実践は保育本来の目的を食育として特化せずに位置づけることで、職員が通常保育の一部として計画実行しやすいと思われる。

さらに、栽培活動においては、地域性を生かしたボランティア協力者を募ることで、幼児教育者の負担という課題を解消できるものであった。

文献

古郡曜子・小田進一、2013、「食育としての栽培活動における課題—幼稚園教諭へのインタビューから—」『北海道文教大学研究紀要』37：131-137

木田春代・武田文・荒川義人・大久保岩男、2012「幼稚園における野菜栽培活動の状況とその食育効果—北海道某市での調査—」『天使大学紀要』13（2）：1-8

Cultivation Activities That Incorporate Volunteers into Early Childhood Dietary Instruction :

From the Case of Eniwa Kindergarten

FURUGORI Yoko and SUGIMURA Rumiko

Abstract : In this study, we investigated the basic idea of cultivation activities, the required instructional planning, and the details of the configuration, based on the instructional planning and practices of Eniwa Kindergarten, where cultivation activities are perceived as an important part of early childhood education. The results were as follows:

- The volunteers (such as former farmers) and the guardians' participation and cooperation (cooking) helped reduce the staff's work.
- The plans were easily executed because they were incorporated into the normal instruction, without designating the cultivation activities as dietary education.